

# YAH!



8月は『酔芙蓉』

You Ain't Heard Nothin' Yet ! ヤー!

## Vol.39 2022.8.10 えんじょい工房・『YAH!』編集室

### みせかけのふるさと

選手をリクルートで集め、そうした“エリート”の蔭で、スタンドから必死の応援を続ける非レギュラー選手たち。高校野球は部活動なのか、それとも広告戦の一環なのか、言われて久しいが、核心に触れようとすると、どこかしらからの圧力なのか、相変わらずのタブー扱いである。試しにわがふるさとと代表校の出身中学を見てみると、こうした行為自体が野暮なことと言われそうだが、とにかく見てびっくり、登録メンバーの殆どが他県出身であり、界限の生徒というのはほんとうに数えるほどのものだ。それでも「おらが国さの代表」と声援を送るべきなのかもしれない。そういう自分だって、ふるさとを離れて既に半世紀、「あれはふるさとではない」などと批判めいて言う資格などない…ということなのだろう。そもそもそうしたエリートを何かしらの方法で集めて作ったチームと、基本的に学校近辺だけでできているチームが同じ舞台上で競うこと自体、大いに違和感を覚えるが、全国を見てもその戦力に昔ほどの格差がなくなつて、それぞれの地方も応援のしがいがあるというもの…とはやはりどうしても割り切れないのである。

### 【こんな唄に出くわした⑧】 六本木ララバイ

作詞 エド山口  
作曲 岡田史郎  
歌 内藤やす子

あなたのやさしが  
痛いほど分かり過ぎる  
さよならの言葉さえ  
言えずに別れた人よ  
季節の足音で聞きながら  
ララバイララバイ瞳を閉じて  
東京の夜明けに歌う子守唄

1984年リリースというから、二度目に勤めた会社に慣れた頃の曲ということになる。歌詞を眺めて、どうしてこれが“六本木”なのかよくわからない、もしや『東京ララバイ』という曲があつて、それに対抗してのことであつたかと思ひ調べてみると、もしかするとそうかもしれないと勘繰つてしまった（『東京…』は1978年発売）が、実のところはわからない。しかし、歌唱力のお蔭もあるのだろうが、「東京の夜明けに歌う子守唄」のサビはこれもまた実に沁みるのである。ヒットしたという記憶も微かにあるが、やはり、当時は心に余裕がなかったか、或いは「六本木」限定ということで個人的には印象に、そして記憶に確かに残らなかったのかもしれない。

### 【今月の花 八月・葉月】

### 酔芙蓉（すいふよう）

これはいかにも艶っぽい『石楠花（しゃくなげ）』に匹敵する響きだ。『向日葵』では暑苦しく、『朝顔』では馴染みがあり過ぎて面白みに欠けていて？そこで酔芙蓉というわけだ。

### 【こんな映画を観てきた】

### 『愛の讃歌』 Piaf -1974/仏 監督:ギイ・カザリル

第一次大戦さ中の一九一五年十二月十九日。パリの舗道にひとつの生命が生み落とされた。父は大道芸人のルイ・ガルシオ、母はリーナといった。生まれた子はエディット（ブリジット・リエール）と名付けられた。

やがて、「アコーディオン弾き」の曲が流れ、深い悲しみに充ちた声流れ出た。呆然と聞き惚れる客席の関係者たち。エディット・ピアフは、ここに栄光と悲惨が渦巻く偉大な歌手への第一歩をしるしたのだ。その、「名付けられ」てから、「やがて…」までの、まさに波乱万丈たる人生模様のお話である。まあこのての作品は、エンディングにタイトルでもあり、「大成功」となったこの曲が流れれば、だいたいうまくいくことになるのだが、ヒットしたかどうか、あまり記憶がないが、そもそも成功者のことを描くわけで、うまくいって当然といえが当然のことなのだろう。